

暗号舞踏人の謎

アーサー・コナン・ドイル

訳者 三上於菟吉

 CAS-UB
Cloud Authoring Service for Universal Book



暗号舞踏人の謎

The Adventure of the Dancing Men

アーサー・コナン・ドイル

訳者 三上 於菟吉

アンテナハウス株式会社

ホームズは全く黙りこんだまま、その脊の高い痩せた身体を猫背にして、何時間も化学実験室に向つていた。そこからは頻りに、いやな悪臭がただよつて来る、——彼の頭は胸に深くちぢこめられて、その恰好は、鈍い灰色の羽毛の、黒い鳥冠とさかの奇妙な鳥のようにも見えた。

「そこで、ワトソン君、——」

彼は突然に口を開いた。

「君は南アフリカのある投資事業に、投資することは、思い止まつてしまつたのだね」

私はサッと驚かされてしまった。私は彼の不思議な直覚力と云つたようなものには、毎度のことによく慣れていたが、しかしこの私の胸中の、秘中の秘事にずばりつと凶星を指されたのには、全くあきれ返つてしまつた。

「一たい君は、どうしてその事を知つていたのだね？」

私は訊き返した。

「さあワトソン君、ぐうの音が出まいがね」

「いや、全くその通りだ」

「それではね君、とにかくきれいに参つたと云う一札を入れたまえ」
いっさつ

「それはまたどうしてさ？」

「いや、実はもう五分の後には、君はきっと、それは馬鹿馬鹿しくわかり切つたことだと云う

に相違ないからだよ」

「いやいや、僕は決して、そんなことは云わないよ」

「ワトソン君、それでは御説明に及ぶとしようかね」

ホームズは試験管を架にかけて、教授が講堂で、学生たちに講義でもする時のような恰好で話し出した。

「先人の研究材料を基本として、それを単純化して、推論の系統を立てると云うことは、決してそう難しいことでもないのだ。そしてもしこう云う試こころみをして、誰かが中心思潮となつている論説を覆して、更にその聴衆に、あらた新たな出発点と結論とを与えたら、それはたしかに、キザたつぶりなことではあるが、しかし一つの驚歎すべき結果をもたらしたと云つてよかろう。さて、君の左の人差し指と拇指の間おやゆびの皮膚の筋を見て、君が採金地の株を買わなかつたと云うことが、あまり首をひねりまわさない中に解つたと云うわけさ」

「どうも僕には何の事か解らないね」

「いや誠に御もつとも至極——しかしこれはごく手短に説明することが出来るんだ。ここにそれぞれ取り外れていた、鎖の輪があるからね。第一には、君が昨夜俱樂部から帰つて来た時は、君の左の手の指のあたりに、白いチョークがついていたこと。第二には、君が玉を突く時は棒の辺りをよくするために、チョークをつける習慣のあること。第三には、君はサーストン

氏との外には、決して玉を突かないこと、——第四には君が四週間前に、サーストン氏は、南アフリカの採金地の株式募集をやつているが、その締切りまでは一ヶ月あるので、君にも加入してくれと云つて来たと話したことのあつたこと、——第五には、君の小切手帳は、僕の抽斗に入つて錠が下りているが、しかし君はその鍵を決して僕に請求しなかつたこと、——第六には、君がこのようにして、この株式に申込をしなかつたと云うこと、——「ははははははは、何と云う馬鹿馬鹿しく解り切つたことだ！」

私は叫んだ。

「全くその通りさ」

彼はちょっと不気嫌になつて云つた。

「どんな問題でも、一通りわかつてしまふと君には皆小供だましのように解り切つたものになつてしまふのだ。ではここに未解決の問題があるが、ワトソン君、これには君はどう云う解釈を与えるね？」

彼は一枚の紙を机の上に放り出して、また化学の分析の方に向き直つた。

私はそれを見て驚いてしまつた。それは、何かの符牒の文字のようなものであつた。

「なんだ、——これは小供の絵ではないか——ホームズ君！」

私は叫んだ。

「ははははははは、そんなものに見えるのかね！」

「じゃ何なんだね？」

「これは、ノーフォークのリドリング公領^(注1)のヒルトン・キューピット氏が、しきりに知りたがつてのことなんだがね。この謎のような問題は、第一回の郵便配達で来て、その人は二番列車でその後から来ることになつていてるのだ。ああワトソン君。ベルが鳴つてると、あるいはその人かもしれない——」

重々しい足取りが、階段にきこえたと思う中に、一人の紳士が入つて來た。脊の高い、血色のよい、綺麗に剃^あてられた紳士で、その澄んだ目、輝く頬、——と、ベーカー街の霧の中からは遙に離れた処に生活している人に相違ないと思われた。彼が室^(や)の中に入つて來た時に、どこか強健なきびきびしたような、東海岸独特の香^{におい}が、ただよつて來るようであつた。彼は我々二人と握手を交わして、さて腰かけようとした時に、私が見て机の上に置いてあつた、不思議な記号のようなものに目を止めた。

「ああホームズさん、——これをどう云う風にお考えになりましたか？」

彼は叫んだ。

「あなたは大変、奇妙な神秘的なことをお好きでいらっしゃるそうですが、しかしこれはまた一段と、奇妙不可思議なものでしよう。私はあなたが、私が来る前に研究しておかれるよう

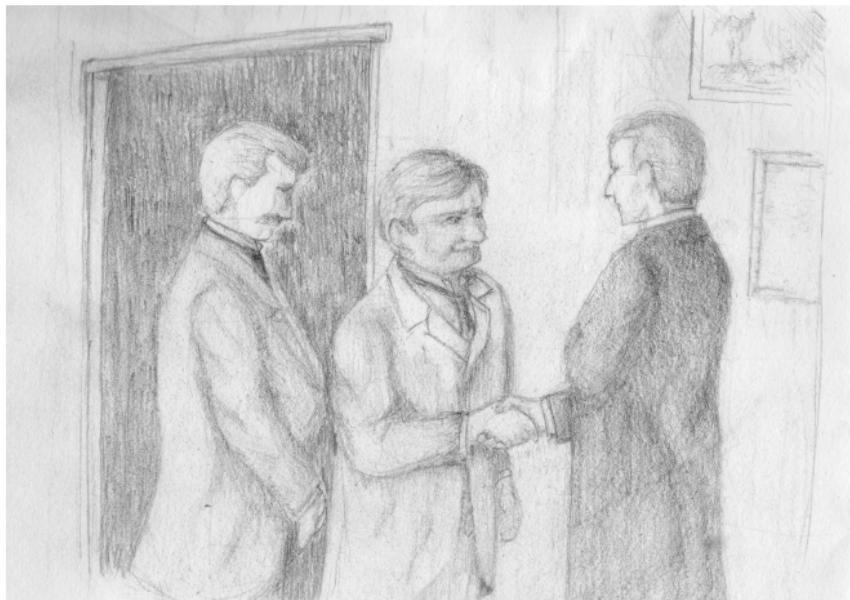


図1 事務所を訪れたヒルトン・キューピット氏

と思って、前もってお送りしたわけです
「これはたしかに奇妙なものですね」

ホームズは云つた。

「ちょっと見れば、子供の悪戯画のようにも思われるし、また、紙の上を踊りながらゆく、でたらめな小さな姿の、絵のようでもありますね。一たいこんな変な、得体の知れないものに、どうしてそんな勿体振つた意味をつけようと仰有るのですか？」

「いや、私は決してそう云うつもりではないのですが、ただ私の妻が大変なのです。実は妻が全く気絶するほど、これに驚かされたのです。彼の女は何にも云いませんが、しかし私はその目の中に、非常な驚怖を見て取りました。それでそれを穿鑿せんさくしてみたいと思つたわけです」



ホームズは紙片を取り上げて、太陽の光線をその上に直射せしめた。その紙片は、ノートブックから離し取つたもので、鉛筆で次のような象形が画かれてあつた。

ホームズはしばらくの間、それを検じらべていたが、やがて、叮嚀ていねいに折りたたんで、自分の手帳の間にはさんだ。「これはとても面白い、稀有の事件かもしれない」彼は云つた。

「ヒルトン・キューピットさん、あなたはお手紙うちの中では、二三具体的なことを書かれてありました、が、しかしこの友人のワトソン博士のために、もう一度一通りお話し下さいませんか」

「どうも私は説明は拙劣まづいのですが、——」

我等の訪客は、その大きな強い手を、組んだり放したり、もじもじさせながら、神経質に語り出した。

「いざれお解りにならないところは、そちらの方からお訊ね下さい、——私は去年、結婚した時のことから申しますが、まずその前にお耳に入れておきたいことは、私の家は、決して金持ではありませんが、ここ約五世紀の間は、現在のリドリング村に住んでいて、ノーフォーク地方では、第一の旧家だと云うことです。

去年の五十年祭には私はロンドンに来て、ランセル街の宿泊所に滞在しました。それは私の教区の牧師の、パークーさんが滞在していた関係から、そこを選んだのでした。そうするとそこに、^{アメリカ}亜米利加の若い婦人が居たのでした。パートリックと云う名前で——すなわちエルシー・パートリックと云う女でしたが、——ふとした機会から、私共は友人になってしまひましたが、その滞在中に私は、遂に男性並々に、その女と恋愛関係に陥つてしまつたのでした。それで私共は早速結婚の手続をすまし、夫婦としてノーフォークに帰つて來ました。とにかく少しは知られている旧家人間が、こんな風にして、全くその身元調査もろくろくしないで、結婚してしまうなどということは、とても乱暴なことと思われるでしょうが、しかしそのことは、私の妻を御覧下されて、彼の女を知つて下されば、お解りになると思われますが、——

とにかく彼の女は、——エルシーは卒直でした。もし私が訊ねさえしたら、何もかも隠さずにおつてくれたと思つています。「わたしにはとても厭な思い出がありますのよ」こう云つて彼の女は語るのでした。「わたしはそれをどうにかして忘れてしまいたいと思いますわ。わたしはもう一切それには触れたくはありませんの。ヒルトンさん、あなたがもしわたしを求めて下さるなら、そりや過去において一点の曇もない女性を得ることになると申しますが、しかいざれあなたは、わたしの言葉を全部信じて下さって、わたしの過去については、何にも訊ねないと云うことを約束して下さい。それでこのお約束が無理だと仰有るのでしたら、どうぞわた

しをこのままのこしてノーフォークにお帰り下さい」と、これは私達の結婚の前日に、彼の女
が私に云つた言葉でした。それで私は彼の女の言葉をそのまま容れて、その後もこの約束をか
たく守つて來たのでした。

そしてその後私共は、この一年の間、結婚生活をつづけて来ましたが、私共は實に幸福でし
た。しかしほぼ一ヶ月前、——六月の末頃に、私は始めて煩累の兆を見たのでした。その頃妻
は亞米利加(アメリカ)の消印のある手紙を受け取つたのでしたが、その時彼の女の顔は氣絶しないばかり
に蒼白になり、手紙を読んでから、それを火の中に投げこんでしまつたのでした。その後は別
に彼の女はそれについて何も云いませんでしたし、私もまた約束にしたがつて、そのことにつ
いては一言も触れませんでした。しかし彼の女は、それ以来はずつと、一つの不安にとざされ
ていて、とかく顔色が浮かなくなり、何ごとかにビクビクしているようでした。まあ俺を信ず
るがよい。俺こそは彼の女の、最もよい伴侶なのだ。私はそう思つていました。しかし彼の女
が云い出すまでは、私は切り出すことは出来ません。しかしホームズさん、くれぐれもお含み
を願いたいのですが、彼の女はたしかに眞実な女性で、もし彼の女の過去に、何か難題のよう
なものがあるとしても、それは彼の女の欠点ではないと思うのです。私はただノーフォークの
田舎者にすぎないので、しかしそれでも、英國では第一流の旧家であると云うことは、彼
の女はよく知つており、また結婚前からも認めていましたから、まさか彼の女は、その私の家

名を汚すようなことは、万々無いと私は確信するのです。

暗号舞踏人の謎

さていよいよこれから、私の話は、奇怪な部分に進みますが、一週間ばかり前、——そうですが先週の火曜日でした。私は窓硝子の上に、この紙に書いてあるような、出鱈目でたらめな小さな、踊つているような姿が、画かれてあるのを発見したのでした。それは白墨でいたずら書きしたものです。したが、私は廄番うまやの少年がかいたのだろうと思いました、その若者は、全く知らないと云いはるのでした。とにかくそれは夜かかれたものでしたが、私はそれを洗い落してから、このことを妻に話しました。ところが驚いたことには、妻はそんなものを大変重大視して、もしまだ画かれたら、ぜひ見たいと云うのでした。それから、一週間の間は、そんなものは画かれませんでしたが、ちょうど昨日の朝、またまた私は、庭園の日時計の上に、この紙片がおかれてあるのを見つけたのでした。私はそれをエルシーに見せましたら、彼の女は気絶して倒れてしまつたのでした。それ以来彼の女は、全く茫然としてしまつて、いつも恐怖にとりつかれた目色をしていります。それでその時に私は、この紙片をあなたにお送りして、手紙をさし上げた次第でした。これはまさか警察に訴えても、ただ笑いものにされて、取りあつてくれますまいし、あなたでしたら何とか方法を教えて下さるだろうと考えたのでした。私は決して金持ではありませんが、しかし何か私の妻を悩ましているものがあるとしたら、私は彼女を全財産を賭しても、保護してやりたいと思うのですが——」

古いイギリスつ呪のこの人間は、単純で卒直で、目は大きく熱意のこもった、堂々たる風貌の紳士であつた。彼がその妻に対する愛情と信実は、外部にまで溢れ出ていた。ホームズは全注意を集めて、この話を聞いていたが、この話が終ると、しばしの間は、静つと沈黙したまま思案に沈んだ。

「いや、キューピットさん、——」

彼はようやく口を開いた。

「これはやはり、あなたが直接に奥さんにお訊ねになつて、あなたに対して秘かれていたことを、話してもらうのが一番早道ではないかと思われますがね」

ヒルトン・キューピットはしかし、その大きな頭を振つた。

「ホームズさん、約束はどこまでも約束ですからね。もしエルシーが、話していいと思うくらいでしたら、彼から話してくれるでしょう。そしてまたもし話したくないことでしたら、私は彼の女に対して強要はしたくはありません。しかしそれと離れても、私には私で取るべき道はあるはずです。そしてそれを私は^{おおい}大にやろうと思うのです」

「いや、そう云うのでしたら、私も全力をつくして御相談に与りましょう。まずお訊ねしますが、この頃からあなたの御近所に、新に来た者があるようなことはお聞きになりませんか？」

「いえ」

「大変閑静なところだろうと思われますが、新顔などが現われて、人々の噂に上るようなことがありますか？」

「えい、そうそうごく近所にありました。しかし私共の近所には、湯治場とうじばがあるので、よく田舎者共が宿をとります」

「この象形文字は、たしかに意味がありましよう。もし全く出鱈目なものだとすれば、それはもうとても解釈が出来ませんが、しかしこれが組織的なものだとすれば、きっとどうにかして解くことが出来ますよ。しかし何しろこれはひどく短いもので、どうにも仕様が無いし、またあなたが持つて来られた事柄も、はなはだ漠然としたことで、考查の基本にはなりませんからね。やはりこれはあなたが、一度ノーフォークにお帰りになつて、注意深く監視をして、もう一度この踊り人の姿が現わたった時に、正しく写し取つた方がいいと思いますがね。先に窓硝子に画かれたものの写しを、見ることの出来ないのははなはだ遺憾ですが、いずれ近所に最近に現わたした者に対しても、慎重の注意を向けなさい。そして新たな証拠が得られたら、またお出で下さい。これがもうあなた対しての、僕の最善のお答えです。それでヒルトン・キューピットさん、もし何か新たな展開がありましたら、その時は私はいつでも早速出発して、ノーフォークのお宅でお目にかかりましよう」

この会見の後、シャーロック・ホームズは、しつかり考えこんでしまつた。そしてこの後二

三日の中、彼はたびたび手帳から、例の記号の画かれてある紙片を取り出しては、長いこと熱心に見つめているのであつた。その後二週間ばかりの間、彼はそのことを、曖にも出さなかつたが、ふとある日の午後、私が外出しようとしているところを呼び止めた。

「ワトソン君、出ないでいる方がよかろうと思われるんだがね」

「なぜ？」

「今朝ヒルトン・キューピットから電報が来たのだ。そらあの舞踏人形のヒルトン・キューピットを知っているだろう。彼は一時二十人にリバプール街に着くと云つてゐるのだ。で、もうやがてここに見えるだらうと思うのさ。その電報を綜合すると、どうも何か重大な新らしい出来事があつたように思われるのだ」

やがてまもなく、二輪馬車が全速力で、停車場から我等のノーフォークの紳士を乗せて、來たのであつた。大変悩み衰えているらしく、目は疲れており、額には皺を寄せていた。

「これには全く、すっかり弱らされてしましました、ホームズさん、——」

彼は半病人のように、腕椅子にもたれ寄りながら云つた。

「どうでしよう、——自分の周囲に未知の未見の人間が、何か策動していて、しかもその上に妻がもう一寸刻みに、殺されてゆくと考えては、とても我慢が出来ませんでしよう？ いやこれこそ全く生きた氣持はありませんよ。いや私の妻は刻々に、弱つていきます。もう刻々に弱

つて私の前から消えてしまいそうなんです」

「奥さんは何も仰有いませんか？」

「いえ、何も云いません。しかし彼の女は、云おうとしたこともあつたようでした。やはり遂に云い出し得ませんでした。私は妻を助けようとしました。しかし私はまずかつたので結局彼の女を怖れすぐませてしまふだけでした。彼の女は私の古い家庭のこと、私の家庭の地方においての名聞、またその汚れない名誉と云つたようなものについて、言葉を触れさせることもありましたが、その時は私は、いよいよ大切な要点にゆくのだと思うと、もうその中に、^{うち}話は外に外れてしまうのでした」

「しかしあなた御自分で、気のついたものはありませんでしたか？」

「いやホームズさん、それはたくさんあります、私はぜひあなたにお目にかけたい、新たな舞踏人の絵を持ってきました。そして更に重大なことは、私はある者を見たのです」

「ある者を、——それはその絵を画いた当人ですか？」

「そうです。私はその者が画いているところを見ました。いやとにかく、最初こう順序を立てて申しましよう。私がこの前にお訪ねして帰つてからまず、次の朝に新たな舞踏人の絵を見たのでした。それは芝生の横にある、物置の真黒い扉の上に、白墨で画かれたものでしたが、私のところの正面の窓から目に止まつたのでした。私はそれを正確に写し取つて来ましたが、これ

がそれです」

彼は一枚の紙をひろげて、テーブルの上に置いた。それは次の図のような、象形記号と云つたようなものであつた。

「素敵！ 素敵！ さあその先を、——」

ホームズは云つた。

「私がそれを写し取つてしまつてから、その絵を消してしまいましたが、その次の次の朝に、また別のが画かれてありました。それがこの方です」

ホームズは、手をもじやもじやさせ、歓喜の微笑をもらした。

「材料は着々と集まつて来るぞ！」

彼は云つた。

「それから三日の後、紙の上に走りがきされた、一枚の通牒(メッセージ)が日時計の上の、小石の下に置かれてありました。それはこれです。御覧の通り、これはすべて同一人のものです。それでこの後は私は、一つ待ち伏せしてやろうと思ひ立て、拳銃(ピストル)を持って、私の書斎に位置を取り、芝生や庭を見張りました。午前二時頃、——私が窓際に腰かけていましたが、外は月夜で仄(ほの)あかるかつたがしかし、その外はもちろん暗闇でした。その時私はふと後に、人の気配を感じたと思う



と、それは寝巻姿の妻でした。彼の女は私に、寝室に帰るようにと云いましたが、私は卒直に、私たちに馬鹿氣いたたずらをする者を突き止めようと思うのだと告げました。そうすると妻は、それはつまらない悪戯に相違ないのだから、私に深く気に止めないようにと云うのでした。そして「もしこんなことが本当に、あなたを困らすのなら、ヒルトン、私たちは旅に——出れば、こんな五月蠅いことは避けられるではないの」と云う風に云うのでした。「だつてそんな馬鹿氣た悪戯に、自分の家を追い出されたりして、世間の笑い物になつたりしてはいられないではないか、——」私はこう答えました。「えい、それもそうですね。でもとにかく寝室にいらっしゃいよ。朝になつてからよくお話が出来るじゃありませんか」彼の女は更にこう云うのでした。

しかし彼の女はこう云うと共に、彼の女の白い顔は、それは月光の中としても、あまりに白いと思われるよう、蒼白になつて来て、手を私の肩にしつかりとかけました。その時に物置小屋の蔭の中に、何か動いているのに目が止まりました。何かいつそう黒い影が、その蔭の角のところを這いまわって、戸口の前に躊躇つたのでした。私はやにわに、ピストルを持って飛び出そうとすると、妻は両腕でしっかりと私を抱き止めて、顛えるような力で押えるのでした。私は妻を振り放



図2 ヒルトン・キューピット夫人

そうとしましたが、彼の女は全く必死でした。私はやつと振り払って、外に出てその物置へ行つた時は、もうその姿は見えませんでした。しかしたしかにその者は来た形跡はあって、扉の上には例の舞踏人姿の画(え)がかかれてありました。それは以前に二度かかれたものと同じものですが、その写しはこれです。それから私は周囲を残る限なく探しましたが、もうその他には何の痕跡もありませんでした。しかしそれから更に驚いたことには、その者はその後も現われたらしく、翌朝になつて私は、例の扉(と扉の上を見ましたら、私が前夜見ておいたものの下に、更に新らしいのが画かれてありました

「その新らしいのも写し取りましたか？」

「えい、とても短いものですが、これです」

彼は更に新らしい紙片を取り出した。その新らしい舞踏人姿は次のようなものであつた。(注2)
「いや、ちょっと——」

ホームズは云つた。彼は非常に気乗りがして来たらしかつた。

「これは最初のに、ただ附けたしに画かれてありましたか、それとも全く別のものに離して
画かれてありましたか？」

「これは扉(と扉の別(かがみいた)鏡板にかかれてありました」

「素敵だ！　これは我々にとつては、最も重要なものだ。これではなはだ有望になつた。さて



ヒルトン・キューピットさん、とても面白いですが、その先を云つて下さい」「ホームズさん、もう何も云うことはないのですが、——ただ私は、その夜妻が、私が悪漢をつかまえるために、飛び出るのを引き止めたことについて怒りました。そうすると妻は、私が怪我をしてはいけないと思ったからと云いわけするのでした。しづかしの間は私に、妻はその者の何者であるかを知つていて、またその変な相図もわかつていて、彼の女の案じているのは、私ではなく、向うの者の怪我であると云うことが、閃きましたが、しかしまよく考え方直してみると、ホームズさん、彼の女の声の調子にも、また目の色にも、この疑念をかき消させるものがありました。それで私はやはり、彼の女が本当に心配したのは、私自身の身であつたのだと考えるのです。これでもう話は終りました、が、さてどうすればよろしいのか、これに対する方法を教えていただきたいのですが。——まあ私の考え方としては、百姓の若者共を五六人も待ち伏せさせておいて、その者が出て来た時に、したたか打ちのめして、以後私共に近寄れないよう^{おさま}にしようかとも思っていますが、——」

ホームズは云つた。

「一たいあなたはどのくらい、ロンドンに滞在することが出来ますか?」

「私は今日中には、帰宅しなければなりません。私はどんなことがあつても、妻を一人で夜を暮させることは出来ません。彼の女はもう非常に神経質になつていて、どうしても僕に帰宅するようにと云うのです」

「いや、それは御もつともです。しかしもしあなたが、滞在しておられるなら、一両日中にはあなたと一緒に出かけることが出来ると思いますが、——とにかく、この紙は置いて行つて下さい。私はごく最近にお訪ねして、この事件に対しても、多少の吉報を齎すことが出来ると思いますから、——」

シャーロック・ホームズは、この訪客が立ち去るまでは、いかにもその職業的な、冷静を保つていたが、しかし彼の容子を見なれている私には、彼は内面では、ひどく昂奮しているに相違なかつた。ヒルトン・キューピットの広い脊中が、扉の外に見えなくなるや否や、彼は机の上に走り寄つて例の舞踏人画の紙を取り出して並べて、とても大変なこみ入つた計算を始めた。二時間ばかりの間、——彼は何枚も何枚も、数字と文字を書いては、その仕事に没頭した。全く私がその室にいるのさえも忘れて、一生懸命に続けた。ある時は多少に仕事が進むもののように、口笛を吹いたり歌つたりし、またやがては、全くその長い謎に閉口してしまつたようになつて、盛んに手をもじもじさせながら室の中をぶらぶらと歩き出した。それから海底電信機

式に、長い電報をかいた。

「もしこの返事が、僕の注文通りのものだつたらワトソン君、——君の蒐集しゅうしゅうの中に、また実に素晴らしいものを加えることが出来るんだがね」

彼は云つた。

「明日は我々はノーフォークに行つて、あの人間が苦しんでいる秘密事に、決定的な新たな展開を与えることが出来そうだ」

私はとても好奇心をそそられてしまつた、しかしながら私は、彼はいつも自分の方から、いい時を見計らつて話してくれることはよく知つてゐるので、私の方から訊ねることはしなかつた。しかしその返電はなかなか来なかつた。ホームズはその間を、呼鈴に注意しながら、ヤキモキして待つた。二日は空しく過ぎてしまつた。しかしその二日目の夕方、やつとヒルトン・キューピットから、一通の手紙が来た。その手紙によれば、ヒルトン・キューピットの身辺は、その後は静穏であつたが、しかしその朝、またまた、日時計の上に、長いものを画いたものが乗つていたので、その写しをとつて送つてよこしたのであつた。それは次のようなものであつた。

ホームズは数分間の間、——この奇怪な帶模様の絵に見入つていたが、突然、驚愕と困惑の声を上げて起ち上つた。その顔は不安のために全く色を失つていた。

「これはうつかりしてしまったかもしねない！」

彼は云つた。

「今夜これから、北ワルシャムに行く汽車があるかね？」

私は時間表をくつてみた。ちょうど最終列車が出たばかりのところであった。

「じゃ仕方がない。」
——あしたの朝早く朝食をすまして、一番列車に乗

ホームズは云つた。

「俺たちは出来るだけ早くゆかなければならぬ。これがすなわち待ち設けた海底電信なのだ。ちょっとハドソン夫人、また返事がいるかもしませんが、——いやこれでよい、これでよい。この通信が手に入つた以上は、いよいよ遅れてはならない。一時も早く、ヒルトン・キューピットに、この事を知らせてやらなければならぬ。これがすなわちあのノーフォークの先生を悩ましてゐる、蜘蛛の網だからね」

たしかに着々とその通りに進んだ。私はその話を一時は子供威しと
思ったのであつたが、しかしその暗澹たる真相を知るにつれて、私はそ

の後感じさせられた氣味悪さを、今更にまた深く感じさせられた。私は読者諸君には、どうにかしていい話をきかせたいと思うのであるが、しかし事実はこうであつたのだ。私はこのリドリング地方と云う名前が、僕が数日の間に、全英國の人口に膾炙かいじやした言葉となつてしまつた物語を、そのままここに述べてみることとする。

私たちが北ワルシャムに着いて下車して、我々の行先を云うや否や、駅長が我々の前に走つて來た。

彼はそしてこう云つた。

「あなた方はロンドンからお出でになつた、探偵の方々でいらっしゃいますか？」

ホームズの面上には、当惑の色が現われ出た。

「どうしてそう思うのです？」

「いえ実はじき今し方、検察官のマーチンさんが、ノーアウイツチから来て、ここを通過して行つたばかりなのです。しかしあるいはあなた方は、外科医でいらっしゃるかも知れない。——彼の女はまだ死にませんよ。いやさつききいた容子では、たしかにまだ死がないとのことでしたがね。あなた方は間に合うでしょう。——もつともどうせ絞首台にゆくことですがね」

ホームズの顔はすっかり不安に蔽おおわれてしまつた。

「我々は、リドリング村に行く途中ですが、しかし実は、全くどんなことが起つたのか、きい

てはいないです」

彼は云つた。

「それはなかなか大変なことですな」

駅長は云つた。

「ヒルトン・キューピット夫妻は、どちらも撃たれたのだそうです。召使の者の云うには、ま
ず夫人が檀那さんだんなを撃つて、それから自分も撃つたのだそうですがね。それで檀那さんの方は
もう事切れてしまい、夫人の方は虫の息ですって、——どうも全く、あたら名門の末を本当に、

——」

ホームズは一語も発せず、馬車に大急ぎで乗り、それから七哩まいる以上の道のりを、全く黙し
切つたままであつた。私は実際この時ほど、ホームズが落胆している様子を、そうたびたび見
たことはない。彼は町から以来と云うものは、全く不安に塞じきされた今まで、ただ凝じつと朝刊に、
不安な目を向けているだけであつた。そして結局、最も悪い結果の予想が、俄然はつきりして
しまつてからは、彼はもう救うべからざる憂鬱に陥つてしまつたのであつた。彼は坐席に凭もたれ
て、沈思のために全く茫然自失の容子であつた。しかしもちろん我々の馬車の両側には、とて
も興味ある眺望があつたのであつた。すなわち我々の馬車の両側には、英國の特有の田園が展
開し、方々に散在している田舎家は、今日の殷盛な人口を思わせ、またあつちにもこつちにも、

大きな四角な塔の教会が、平原の地平線の上に屹立し、緑の濃い風景、——と、昔の東部アングリアの、光栄と殷盛を想わしめるものであつた。その中に遂に、董色の独逸海の海面が、ノーフォークの海岸の緑の縁を越して現われた。それから馭者は、茂った樹木の間からそびえ立つてゐる煉瓦と木材の破風を、鞭で指しながら「あれがリドリング村です」と云つた。

私たちが玄関の戸口に乗りつけると、その前面は、テニスコートの横であつたが、黒い戸の建物と、台の上に乗つてゐる日時計が目に止まつた。これ等については私たちは、もちろん不思議な連想を持つてゐるのである。一人の気のきいたような小さな男が、蝶を塗つたような髪をしていて、二輪馬車から敏捷な容子で下り立つた。その男は、自分自身で、ノーフォーク警察の、検察官マーティンであると云つて紹介して來たが、私の友人の名前を聞いた時は、かなり驚いた様子であつた。

「これはまた、ホームズ先生、——犯罪は今朝の三時に行われたばかりなのですが、ロンドンで、どうしてこんなに早くお聞きになつたのですか？ 私と同時にこの現場にお出でになると云うことには全く驚きました」

「私はこのことを予想したのでした。実はそれを防止するためにやつて來たのでしたが」

「それではあなたは、われわれの知らない、重大な証拠をお持ちになつていられるでしょう、——彼らは大変琴瑟相和した夫婦だつたと云ふことですがね、——」

「私はただあの舞踏人の話を知っているだけなんですが、——」

ホームズは云つた。

「いずれ後刻、そのことはお話しましよう。いずれにしても、もう手遅れしてしまいましたが、しかし僕は、多少持ち合せておる智識を、この事件の解決のために、出来るだけ提供し、利用したい希望なのですが、あなたはこの事件の調査については、私と協同して下さいますか？またそれとも別々に行動しましようか？」「いえホームズ先生、協力してやらせて下されば光栄の至りですが、——」

その検察官は熱意をこめて云つた。

「では早速証拠を持ち寄り合つて、時を移さずこの邸内の調査を始めようではないですか、——」

検察官のマーティンは私の友人に大変好意を持つていて、私の友人を自由に活動させて、ただその結果を注意深く見ておられるだけであった。白髪の老田舎外科医が、ヒルトン・キューピット夫人の診察に来ておられたが、その話に因れば、彼の女の傷は重傷ではあつたが、しかし命には差支えがなかろうと云うことであつた。^{たま}弾丸は彼の女の前額を貫通していたが、たぶん彼の女はしばらくの間は、意識を失つたに相違なかつた。彼の女が撃たれたのであるのか、それとも自分から自分を撃つたのであるかと云うことについては、彼の女は決して口を開かなかつた。

そしてそれは疑もなく、ごく近距離から発射されたものに相違なかつた。室の中に一挺のピストルつきり見出されなかつたが、しかし薬莢は、二つ空になつていた。ヒルトン・キューピット氏は、心臓を打ちぬかれていた。そのただ一挺のピストルは、二人のちょうど中間の床の上に落ちてあつたが、したがつてこれは、ヒルトン・キューピットがその妻を撃つてから、自身を撃つたのか、それとも妻の方が先に夫を撃つて自分を撃つたのか、いずれとも考え迷わることであつた。

「ヒルトン・キューピットさんは動かされましたか？」

ホームズは訊ねた。

「いいえ、奥さんの外^{ほか}は、何も動かしません。怪我をしている者だけは、そのまま床の上に放つておくわけにはゆきませんからな」

「あなたはいつ頃ここに来られました？」

「四時でした」

「外に誰かいましたか？」

「巡査が来ています」

「では何にも手を触れないわけですか？」

「えい、決して、——」

「なかなか慎重におやりになりましたな。誰があなたをお迎えにゆきました？」

「女中のサウンダーでした」

「最初に見つけたのはその女だつたのですか？」

「その女とそれから、料理^{コック}女のキン^{ング}さんと云うのと二人だそうです」

「その人たちはどこにいますか？」

「たぶん台所にいるでしょう」

「そう、それでは早速、その人たちからきいてみよう」

櫻の腰板の、高い窓のついた古い広間が、審理所にあてられた。ホームズは大きな古い型の椅子に腰かけて、古色蒼然とした顔から燐々^{けいけい}とした眼光を輝かしていた。その目の中には、彼が依頼されながら、みすみす助ける機会を失つてしまつた依頼者のために、見事に復讐してやるまでは、この事件に心身を賭してやるという決心の色が窺われた。小さつぱりとした検察官のマーティン、灰色髪の老田舎医師、私自身、のろまなような田舎巡査とが、変な恰好のつかない一坐をつくつた。

その二人の女は、よく明瞭に話してくれた。その話に因ると、彼の女たちは爆音に目をさせられたのであったが、その時この爆音は、ものの一分も間があつたろうか、すぐにきえたそうである。彼の女たちは室をとなり合せて、寝ていたのであつたがキング女の方がサウンダ

一女の方に、驚いて飛びこんで行つた。そして二人は一緒に階段を下りた。書斎の扉は開いていて、テーブルの上には、ローソクがともつていた。そして彼の女たちの主人は、うつ伏せになつて室の中央に斃れて、もう全く息は絶えており、夫人の方は窓近くに這い寄つて、壁に頭を寄せかけていたが大変な負傷で、顔の半面は血まみれになつていて、もう何も云うことが出来ず、ただ呻吟^{うめい}ていたそうである。室の中はもちろん、廊下も何も、火薬の煙^{におい}と臭^{におい}で一ぱいで、室の窓はたしかに閉められて、内側からは掛け金もかけられてあつたと。二人の女どもはこの点については、とてもよくはつきりしていた。彼の女たちは早速、医者と駐在所に知らせた。それから馬丁と廄番の少年の手を藉り^かりて、夫人をその室に移したのであつた。主人夫婦はたしかにその夜は寝室に入つたに相違なかつた。婦人のほうは日常の着物を着ていたが、しかし主人の方は、寝衣^{ドレッシングガウン}に、寛服^{ナイトガウン}を重ねていたのであつた。書斎の中は全く一物も動かされた形跡はなかつた。その女たちの見て知つているところでは、その夫妻の間に、喧嘩^{アラハ}と云つたようなものがあつたためしも無いようであつたと。とても仲のよい夫婦と見られていたのであつた。

以上のこととは女中たちの陳述の大要であるが、検察官マーティンに答えた言葉では、扉と云う扉^{ドア}は全部、内部からしっかりと締め下されてあつて、誰も家の中から遁げ出したはずはないと言ふことであつた。それからホームズの問い合わせに対する回答では、彼の女たちは、一番上の自分たち

の室を飛び出した時に、火薬の臭をかいだと云うのであつた。

「これはなかなか慎重にからなければならない大問題ですな」

ホームズは仕事仲間に云つた。

「さあ、それでは、一つ室の中を徹底的に調べてみようじゃないですか」

書斎は小さな室であつた。三方は書物を立て並べられ、書机は普通の窓に向つて置かれ、そこから庭園は見渡されるのであつた。まず我々は第一に、この不幸な田園紳士の死体を検べた。彼のがつかりした軀幹くかんは、室内にさし渡しになつて横たわっていた。着衣は大変乱れていたが、それはあるいは彼が眠つてゐるところから、飛び起きたのだろうと思われた。弾丸は前面から撃たれて、彼の心臓をやつつけたまま、体内に止まつていた。彼の死はたしかに即死で、しかももう苦痛さえも無いものであつたろう。火薬の痕跡は、寝衣ドレッシングガウンにもまた手にもついてはいなかつた。また田舎医師の言葉では、妻の方は顔には血がまみれていたが、しかし手には何にもついてはいなかつたと云うことであつた。

「手に何にもついていなくつては、何にもならない、——もつとももしついていたとすれば、もうそれで何もかも一目瞭然だけれど、——」

ホームズは云つた。「しかしもつとも実弾がうまく装填されておれば、何発でも何の痕跡ものこさずに、撃つことも出来ることは出来るのだが、——さてもう、キューピット氏の死体は、

動かしてもよろしいでしょう。それから先生、夫人を撃つた弾丸は、見つかりましょうか？」「何しろ非常な大手術をしなければなりません。しかし実弾は四発ありますから、二発で二人が撃たれ、弾丸の勘定はよく合いますがな」

「そう思いますか？」

ホームズは云った。

「あなたはあのたしかに、窓の縁を射た弾丸も勘定に入れておられるでしょうか？」

彼は突然振り返って、痩せた長い指で一点を指さした。なるほど、窓の下際から一時ばかりインチ上の処を、見事に貫通した穴があつた。

「ああ！」

検察官は歎声を上げた。

「どうしてあんなものに目が止まつたのですか？」

「いや私は探していたのです」

「これは怖ろしい！」

田舎医者は云つた。

「いや確に仰せの通りに相違ありません。それでは、第三弾が発射されてるわけですから、第三者がいなければならないわけですな。しかしそうしたら、どんな者がここに現われて、そし

てどうして遁げ出したのでしよう？」

「そのことがすなわち、これから我々の問題ですがね」
シャーロック・ホームズが云つた。

「ね——検察官のマーティンさん、女中たちは室を出るや否や、火薬の臭がしたと云つた時に私はそれはとても重要なことだと云つたでしよう？」

「えい、たしかに仰有いました。しかし私は正直のところ、あまりそれに同感も感じていませんでした」

「このことはつまり、発射された時には、室のドアも窓も開いていたのだと云うことを暗示しているのです。もしそうでないとしたら、そんなに早く、火薬の臭が家中に、ただよい渡るはずはないからね。それにはどうしても一陣の隙間風を必要とする。ドアも窓も、ほんのちよつとの間開かれたのだ」

「それはどうして証明なさいますか？」

「ローソクが傾いてへつていなかつたから、——」

「ああこれは敵わない！」

検察官は叫んだ。

「この悲劇の時は、窓は開いていたと云うことを認めてみると、この事件には第三者があつて、その開いていた窓を通して、窓の外から射撃したに相違ないと云うことが考えられる。それからその者を撃つた弾丸のどれかは窓縁に当つたに相違ない。私は見渡したら果して、弾痕があつた！」

「しかしそうしたとしたら、窓が閉められて、しかも内側からしっかりと締めつけられたのはどう云うわけでしょう？」

「女と云うものは、本能的に窓を閉めて、しかも締めつけるものではないですかね。ああ、おやおや、——これは何だろう？」

机の上に婦人の手提袋があつた。気のきいた小さな、鱈皮のものであつた。ホームズは中のものを取り出した。その中には、英蘭銀行の五十磅紙幣二十枚が、印度ゴムのバンドでしばられて入つていた外、あとは何にもなかつた。

「これは法廷で必要だらうから、よく注意して保管しておくように」

ホームズは中味をしつかりと入れて、その手提袋を、検察官に渡しながら云つた。

「さて今度はこの第三弾の正体をつき止めなければならぬことになつた、——もつともこれは木の裂け具合から見て、明かに内側から発射されたものだが、——さて料理女のキングさんにちよつとききたいが、あのキングさんあんたは、とても高い爆音に目をさまされたと云つた

が、これは最初の一弾が、次の爆音よりも大きかったと云うことかね？」

「はあ、左様でござります。わたしはその音で、目を醒ましたのでございましたが、どうもはつきりとはいたしませんが、とにかく大変大きな音でございました」

「君は一度に二発うたれたのだと云うようには感ぜられなかつたかね？」

「さあ、それははつきりとは申し上げられないんでございますが——」

「しかしそれはきっとそうだつたろう。さて検察官のマーティンさん、もうこの室で調査することは、全く尽きてしまつたと思われるが、何でしたら今度は庭の方を歩きまわつて、新たな証拠をさがそうじゃないかね」

書斎の窓の下からずつと、花壇になつていたが、我々はそこに近づいてみて、あつと驚かされてしまつた。花は踏みにじられ、柔かな土の上には、足跡が一ぱいについていた。それは男性の大きな足跡で、特に足先が鋭く長い足のものであつた。ホームズは草や木のあいだを、レトリーバー犬が傷ついた鳥を探すように、探しまわつたが、遂に彼はひどく喜んだ叫びを上げて、身をこごめて、小さな真鍮しんちゅうの円筒を拾い上げた。

「僕はたしかに、ピストル又は、薬莢の自動排除装置があつて、きっと第三弾があるに相違ないと睨んでいた、——」

彼は云つた。

「さあ検察官マークさん、これでもうほとんど、この事件も調査が出来上つたですな」

この田舎検察官はしかし、ホームズのあまりに急速な、あまりにも鮮かな探査振りに、ただ驚歎の色を現わしているのであつた。最初の中は多少は、自分自身の立場も、発揮したいような傾向も見えたが、しかし今はもうとても歯がたたないと観念して、ただホームズの為すままに、唯々諾々として、後からついて来るだけのことになつてしまつた。

「犯人は誰でしょう？」

彼は訊ねた。

「いやその事はいずれ後にしましよう。実はこの問題には、まだあなたにはつきりと説明しかねることが二三點あるんですがね。とにかくここまで来たのですから、僕はこの上もひた押しに押し切つた方がいいと思われるのです。それから全部を明瞭に発表しましょう」

「犯人があがるまでは、ホームズ先生、あなたの御自由におやり下さい」

「いや別に秘密主義でゆこうと云う意味でもないのですが、いずれ事件の進行中に、長い込み入った説明をすることは難かしいことですからね。まあ僕はこの事件のすべての鍵は持つています。もし夫人が遂に意識を回復しなくつても、この事件は明瞭にすることが出来ますよ。まず第一に、この近所に、エルライジと云う名前で通つてゐる旅館があるかどうか、確かめたいものだがね」

下僕の者共をよく審問してみたが、しかし誰もそんな旅館を知っているものはなかつた。その中に厩番の少年が、この事に対し一条の光明を与えてくれた。それはここから東ラストンの方に、ちょっと離れているところに、こう云う名前の農夫のあることを思い出してくれたのであつた。

「そこはとても人里離れた農場かね？」

「えい、とても寂しいところです」

「どうだろう、——そこの人達は、まだこここの事件について知らないだろうか？」

「さあ、たぶんまだきこえてはいないだろうと思ひますが、——」

ホームズはしばらくの間、——静^じつと思案していたが、やがて小気味の悪い微笑をうかべた。
「おい若者君、——馬の用意をしてくれたまえ。御苦勞だがこの書付を、エルライジと云う人の農場に持つて行つてもらいたいんだ」

彼はポケットから、舞踏人のいろいろの紙片^{かみきれ}を取り出した。そしてこれを前に並べて、机に向つて何かやつていた。そして一枚の書付を少年に渡して、その書付をきつとこの宛名の人には手渡し、またどんな質問をされても、決して答えないようにと云うことを、くれぐれも云い含めた。その封筒の上の文字は、私の目に止まつたが、ホームズの簡明な文字とは似も似つかず、苦心して手跡をかえたものであつた。その宛名は、ノーフォーク、東ラストン・エルライジ農

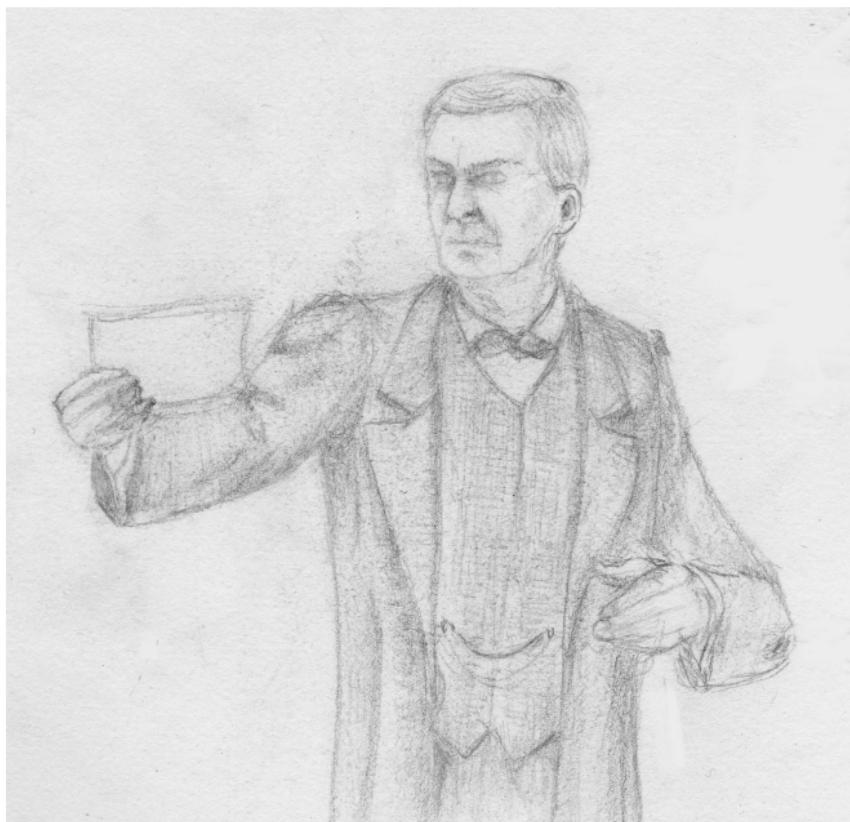


図3 手紙を書いたホームズ

場、アバー・スラニー氏と云うのであつた。

「検察官——」

ホームズは叫んだ。

「護衛の者を派遣してもら
うよう、打電した方がいいと
思いますがね。もし僕の胸
算用に誤りがないとすれば、
あなたはとても危険な犯人
を護送しなければならない
ことになるかもしれないと思
われますよ。いやこの書
付を持つてゆく子供は、きっ
とあなたに電報を打たせる
ことになりますよ。さてワ
トソン君、もし午後の汽車が

あるなら、我々はそれに乗った方がよかろう。やつてしまいたい、面白い化学の分析の仕事もあつたし、またこの事件の方はもう、さっさと片づいてしまいそうだから——」

その若者が出发してしまってからは、ホームズは今度は、下僕たちに指図した。もし夫人を訪ねて来た者があつても、決してその状態を知らせてはならないこと、——そしてその者を早速、応接間に通すこと——こう云うことを彼は、熱心に云い含めた。それから最後に彼は、もう仕事もなくなつたから、いずれまた何か出てくるまで、ブラブラしていようじゃないかね、と云いながら、応接間の方に引き上げて行つた。田舎医者は、患者のところに出かけたので、もう私と検察官と三人だけになつてしまつた。

「さあそれでは、この一時間の間を、最も愉快に、最も有益に過そう」

ホームズはこう云つて、テーブルに椅子を引き寄せ、変なおどけたような、舞踏人を書いた紙片かみきれを、その前に拡げた。

「いや、わが友人のワトソン君、君には君の持前の好奇心を満足させずに、今まで待たせておいたことの、埋め合せをしなければならないし、それから検察官、あなたにはこの事件的一切は、最も刮目すべき職業上の研究問題として現われるでしょう。それでまず第一にあなたにヒルトン・キューピット氏が、ベーカー街で私に相談に来られた事情についてお話しなければならない」

彼は簡単に要領よく、前に述べたようなことを概略して話すのであつた。

「ここにこう云う全く奇妙なものがありますがね。まあ誰が見たって、これがあんな恐ろしい悲劇の、先駆であつたと云つたら、まず一笑に附してしまいたくなりますがね。私は元来、暗号記号については、いささか自信があつて、それについてはつまらない論文もありますが、その中で私は、百六十種の暗号を解析してみましたが、しかしこれはまた、私にとつても全く最初のものでした。この暗号を案出したものの考えでは、これに意味があるなどと云うことは巧みに隠して、ただ子供たちを、気まぐれにスケッチしたものだと思わせるつもりなのだがね。しかし、これも結局文字の代用であるとわかつて、それからあらゆる暗号文字の解釈に適用する法則をあてはめたところ、この解釈も容易でした。最初に私の手に入つたものは、ごく短いものだったので、この記号はアルファベットのEを表わすものだと云うことを、云い切られただけでした。御存じの通り英語のアルファベットの中では、Eは最も普通の文字で、どんな短い文章のなかでも、一番出て来る文字ですからな。この最初手に入つた文章の中では、十五の記号の中で、これは四つだけあって、一番多かったので、これをEと帰納したわけです。それから記号もある時は旗を持ち、ある場合は持つていないが、段々考えたらこの旗は、文章を言葉に区切るためのものでした。私はこれを仮説として立てて、をEと置いたのです。

しかしこまではいいとして、これから先がなかなか大変なのです。英語の文字では、Eの後にあるものは、決してそう決定的ではない。ちょっとした文章などで平均を取つてみたら、あるいは反対の現象を現わしているかもしれない。まあ大ざっぱに云つてみて、T、A、O、I、N、S、H、R、D、L、——と云うのは、その頻出数の順序であるが、しかし、T、A、O、Iなどは、實に伯仲しているからね。これ等の結合を考えて、意味を見出そうと云うことは、それは全く際限の無い仕事になる。それで私は、新たな材料の来るのを待つた。第二回のヒルトン・キューピット氏との会見では、私は二つの短い文章と、一つの牒号^(メッセージ)を提供されたが、この牒号には旗が無いので、单語に相違ないとthought。これがそれですがね。さて单語としてみると、これは五文字から成る单語で、しかも私が先に推定したEが、第一と第四にあるもの。——それはSEVER（切り放す）か、LEVER（梃子）か、NEVER（けつして、打ち消しの）などとなる。哀願に対する返事としては、この最後のものはもう異論なく、最も適当である。そしておそらくはこれは、夫人の書いた返事であろうと思われる点も大いにあるのだ。

これだけのことを見ると、もう記号の云々ではそれぞれ、N、V、R、と云うことになる。^(注4)

しかしまだまだ私には、難関があるのであつたが、幸いに他の文字の解釈に、都合のよい思いつきが浮んだ。つまりもし私の予想が違わないとすれば、この哀訴が夫人の以前の腹心の者から来たものとすれば、両端に E があつて、真中に他の三文字のあるものは、結局、ELSIE と云う名前に、ぴったりと吻合ふんごうして来る。それで更によく調べてみると、三度とも文章の末尾が、この組合せで終っているのを発見した。それでこれは ELSIE に、何か訴えて来たものに相違ない。こうして私は L と、S と、I を得た。しからば一たい何を訴えて來ているのであろうか、この ELSIE の前には、四文字あつて、しかも終りは E である。これは確に COME であろうか、——私は外にも、E で終っている、四文字の単語を考えたが、しかしどうもこの場合に適当と思われるものは見当らなかつた。それで私はこうして、C、O、M、を得たので、今度は再び最初の文章にもどつて、これを言葉に分けて、未発見の記号と共に、書き並べるまでになつた。そうしたら、次のようなものとなつた。

.M.ERE..ESL.NE.

そこで、この中で最初の文字は A に相違ない、と云うことを推定した。と云うのは、この短い文章の中で、三度も出ているから、このよく出て来る文字は A に相違ないと考えた。これは大変有益な発見であつた。そこで、第二の場所は、H であろうと想定してみた。そうしてまたあてはめてみると、

AM HERE A. ESLANE.

となり、また、名前の解りきつた空所を満たしてみると、

AM HERE A. ESLANEY.

私はもうかなりの文字を得たので、今度は相当の自信を持つて、第二の文章に進むことが出来ることとなつた。それをやってみると今度はこんなものになつた。

A. ELRI. ES.

さて、こうなると、私は、Tと、Gを空所に入れると、やつと意味をなして来ることに気がついた——そしてこれはこの筆者のいる家か、旅館の名であろうと推定したわけだ』

検察官マー・ティンと私は、この我々の面前の難事業を、快刀で乱麻を断つように、明快に解決を与えた、私の友人の説明に、全く魅了されて傾聴した。

「先生、それからどうなされたのですか？」

検察官は訊ねた。

「私は種々の理由から、このAbe Slaney. 」云うのは、亞米利加人であろうと推定したのです。このAbeと云うのは元來、亞米利加式の綴にあるし、それに亞米利加から来た、一通の手紙と云うのが、今回の大事件の端緒でしたからな。それに更に私は、この事件には、更にその中につ伏在した、隠れたる犯罪があるに相違ないと睨む理由があつたのです。つまり夫人が過去につ

いて、ちょっと仄めかしたあと、夫に對して絶対にそれを追求させなかつたなどと「云う」とは、明かにそうした理由を暗示しているものだからね。それで私は、私の友人でニューヨークの警務局の、ウイルソン・ハーラードに、海底電信を打つてやつたのです。この男はたびたび、私からお蔭を蒙つてゐるものですがね、で私はこの男に、Abe Slaney と「K」者を知つてゐるかどうかと云つてやつたのだが、その返電はこうだつたのです。

「市俄古(シカゴ)での最も恐るべき悪漢」と。するとちょうど私が、この返電を得た夜、ヒルトン・キューピットは、スラネーからの最後の牒号(メッセージ)を送つてよこしたのです。それにまた、先の文字をあてはめてみると、

ELSIE. RE. ARE TO MEET THY GO.

それでこれにPとDを加えてみると、もうこの牒号の意味は完全なものとなる。(ELSIE PREPARE TO MEET THY GOD. ハルシーよ、汝の神に逢う用意をしろ) これによると、悪漢は説得から威嚇に進んだことがわかり、更に私はこの者の市俄古(シカゴ)での兇悪振りを知つてゐるだけに、もうすぐに実行するだらうと直覚した。それで取るものも取りあえず、友人であり相棒である、ワトソン博士と共に、ノーフォークに駆けつけたのだが、もう時既に遅かつた

「事件を扱うに際して、あなたと協力することが出来るなどと云うことは全く、望外の特權ですね」

検察官は静かに云い出した。

「失礼して卒直に申しますが、あなたはあなた御自身が御満足なさればおよろしいのですが、私は上官に対し、私の職責を全うしなければなりません。それでもしそのエルライジにいる、アベイ・スラニーなる者が、本当に下手人であるとすれば、私がこうしている中に、逃亡でもしてしまうと、とても大問題になりますが、——」

「いや御心配はいらない、——彼は逃亡などはおそらくしないから、——」

「どうしてそう仰有ります?」

「逃亡することはもう、犯罪を自白していることだからね」

「それでは逮捕に向おうではございませんか?」

「いや、もうじきにここに来る」

「ではどうしてここになぞ來るのでしよう?」

「さつき手紙を書いて、招んでやつたから、——」

「いやホームズ先生、それはちょっと^{あて}にはなりますまい。あなたがお招びになつたって、その者は来ると云うわけはござりますまい。それどころかかえつて、感づいて逃亡することになりはしませんでしょうか?」

シャーロック・ホームズは云つた。

「論より証拠——大体間違いはなさそうですよ。ほら、その紳士御自身で、御出張になつたよ」一人の男が玄関の方に、大股に歩いて来るのであつた。その男は、背の高い、男振りのよい、色の浅黒い顔で、灰色のフランネルの着物を着てパナマの帽子を冠り、剛い黒い髪をはやし、高い圧倒的な鼻をうごめかして、籐の杖をふりまわしながらやつて來た。彼は全く意氣揚々として、小径をはばむようにして歩き、堂々と呼鈴を押すのであつた。

「諸君、——」

ホームズは静かに云つた。

「これは我々はドアの蔭にかくれた方がいいようだよ。あんな奴の相手になるには、うつかりしたことは出来ないからね。それから検察官、手錠が入りますよ。さあ黙つて、——」

一分間ほどの間——我々は息を殺して待つた。忘れようとしても、決して忘れるこの出来ない一分間であった。やがてドアは開いて、その男は中に入つて來た。と、——思う中に、ホームズはピストルをその男の頭に狙いつけ、マーティンは素早く、手錠をはめてしまつた。こうしたことが、全く疾風迅雷的にやられたので、流石の悪漢もただ茫然として、何もかもすんでもからやつと、自分が待ち伏せをくつたのだとわかつた。その男は私達を、次から次と、その黒い鋭い目で睨みつけた。そして最後に、ゲラゲラと苦しい笑い声を上げた。

「いや各々方、なかなかうまく、仕組んだと云うわけですか、——これはとんだ災難に遭ったものだ。しかし僕はヒルトン・キューピット夫人の手紙に答えるために来たのです。夫人はここに居るかどうか、教えてくれないですか？　夫人は僕を陥れることに与あずつたのですか？」

「ヒルトン・キューピット夫人は、瀕死の重傷を負うているのだよ」

その男は嗄しゃがれた声で、家中に響き渡るように、悲叫ひきょうを上げた。

「あなた方は気が違っているのだ！」

その男は激しく叫んだ。

「負傷したのはヒルトン・キューピットで、彼の女のはずはない。誰があの可愛いエルシーなどを傷つけるものか！　私は彼の女を威かしはしたかもしれないが、それは神様もお許し下さろう。——しかし私は彼の女の美しい頭の、髪の毛一本にさえも触れはしないのだ。さあそれを取り消しなさい。彼の女は決して負傷しないと云つて下さい！」

「彼の女は死んだ夫の側に、ひどく怪我をしているのを発見されたのだ」

彼は深い呻吟声うめきごえを上げながら、腕椅子に崩れるように腰かけて、手錠のかかつた両手で顔を蔽うた。五分くらいの間は、全く黙りこんでいたが、それからまた顔を起して、今度はもう捨鉢の度胸で、冷静に語り出した。

彼は言葉をつづけた。

「もし私が彼を撃つたと云うなら、彼もまた私を撃つているのです。ここに殺人罪はありません。またもしあなた方が、私があの女を撃つたのだとお思いになるなら、それはあなた方が、私とあの女とをよく知らないからです。私は断言して憚りませんが、私はいかなる男性の愛情よりも、彼の女を深く愛していました。私は彼の女に対しては、権利を持っています。私達は数年前に、それぞれ誓った間柄です。それなのに我々の間に入つて来た英国人などは、全くどここの馬の骨でしょう？ 私は断言しますが、私こそは彼の女に対して、第一の優先権を持つている者で、ただ私はその正統の権利を要求しただけです」

「夫人は君のそう云う人となりを知つたので、君の把握から遁げ出したのだ」

ホームズは厳しく云つた。

「夫人は君を避けるために亞米利加^{アメリカ}から遁げ出して、英國の立派な紳士と結婚したのだ。それに君は未練がましくも追かけて来て、彼の女にその敬愛する夫を捨てて、憎悪し恐怖している君と、遁げ出すことを強迫したので、彼の女は、不幸極まるものになつてしまつたのだ。君も一人の貴人を殺し、しかしてその妻を自殺させて、もうそれで万事休矣^{ばんじきゅうす}というものさ。君のお手柄の一切はこれだけだが、さてアベー・スラニー君、この上はただ法の適用を受けるだけさ」「もしエルシーが死ぬなら、そりやもうこの身体などは、どうなつたつておかまいなしだ」

その亞米利加人アメリカ人は云つた。そして彼は片方てのひらの掌に、皺くしやになつていた書ものに見入つた。

「これを御覧下さい」

彼は目を疑い深く閃かせながら叫ぶのであつた。

「あなた方は私をおどかしているのではないでしようね？　もし彼の女があなた方の仰せのように非常に重態であるとしたら、一たい誰がこの手紙をかいたのでしょうか？」

彼はその紙片をテーブルの上に投げてよこした。

「君をここに来させるために、僕が書いたのだ」

「あなたが書きましたって？　この世界中でわれわれの仲間の外は、誰もこの舞踏人の秘密を解るものがないのですよ。どうしてあなたなどが書けるものですか？」

「君、誰かが案出したものとすれば、また誰かがそれを解くことが出来るさ」

ホームズは云つた。

「さてスラネー君、君をノーアウッドに、連れてゆく馬車が来た。しかしまだ、君の悪業に対して、多少の罪滅しをする時間はある。君は気がついているかどうか、——実はヒルトン・キーヨーピット夫人は、夫君ふくんの殺害に対して、非常に重大な嫌疑を受けっていたのだが、幸いに僕が現われて、たまたま持ち合せていた智識で、夫人は告発されることを免れることとなつたのだ。それで君の夫人に対する、最後の償つくないとして、夫人はこの大悲惨事に対しても、直接にも間接に

も、全然責任はないものであると云うことを、全世界に明瞭にしたまえ

「もうどうにでもなるがよい」

亜米利加人（アメリカ）は云つた。

「えい一そのこと、何もかも有りのままにさらけ出してしまいましょう」

「そうだ。それが一番君のためなのだ。本職もそれを君にすすめる」

検察官はあたかも英國刑法の、厳肅な公明を示すものの如く云つた。

スラネーは肩をすくめた。

「早速申し上げましょう」

彼は語り出した。

「まず第一に皆さんの御了解を得たいことは、私はあの夫人とは、ごく小供の時からの知り合いであると云うことです。私共も七人の仲間で市俄古（シカゴ）で徒党を組んでいたのですが、あのエルシーの父はその首領でした。俐巧な人で、パトリック老人と云つたものです。この暗号を案出したのも彼ですが、これはもうあなたがこれを解く鍵を持つていなかつたら、ただ小供のいたずら書としか思われないものですからね。さて、あのエルシーは私共のすることを多少気がついたのですが、しかし彼の女は、こうした仕事を見ることはもう堪えられなかつたのです。そして彼の女は自分の、これは公明正大な金を多少持つていたので、私達の中から抜け出して、

ロンドンに遁げて来てしまったのです。私は彼の女とは婚約の仲でしたが、これは私は今でもそう思つてゐるのですが、もし私が商売替えをしたら、彼の女はきっと私と結婚してくれたに相違ありませんでした。彼の女はかりそめにも不正なことに対しては、掛り合いを持ちたくなかつたのでしょう。そして私がやつと彼の女の居所をつきとめた時は、彼の女はもうこの英国人と結婚していました。それで私は手紙を出しましたが、しかし返事はくれませんでした。私はそれでこつちに海を越えて來たのですが、手紙はもう何の役にも立たないので私は、あの通牒を彼の女の目の止まるところに置いたのでした。

そしてとにかく私がここに来てから一ヶ月になります。あの農場に住んで、地下の一室を持つて、夜間は毎夜のように、自由に出入が出来ました。しかし誰もそのことは知りませんでした。私はあらゆる手段をつくして、エルシーを誘い出そうとしました。彼の女はたしかに、通牒は読んだに相違なく、遂に一度だけは返事をくれました。それに私は少し気をよくして、彼の女の脅迫を始めたのです。それから彼の女は一本の手紙をよこして、私に立ち去つてくれるようになると、懇願して来ました。そしてもし夫の身辺に、その名誉を汚すようなことでも起つたら、もう彼の女は立つても寝てもいられないからと云うのでした。そして、もし私が素直にここで立ち去つて、彼の女を安穩にのこして行つてくれるなら、夫の眠つているのを見計らつて、^あ曉け方の三時に起きて来て、私に立ち退くように説得するために、金を持って来ました。私は

——これを見て、嚇かとしてしまつて、彼の女の腕を取つて、窓から引ずり落そうとしたのです。と、
——その瞬間に、彼の女の夫は、ピストルを手にして、飛び出して来ました。エルシーは床の
上に蹠まつてしまつたので、私たちは顔と顔とを向き合せていました。私も身体をこごめまし
た。そして鉄砲を取り出して、彼を脅かして自分も遁げようとしました。しかし彼は発射し、
しかも弾丸は外れました。それで私もほとんどおくれずに引き金を引きました。彼は斃れたの
です。私はそれから庭を横切つて遁げましたが、私の後から窓を閉める音がきこえたのでした。
皆さんこれは、すべて有りのままで、神明に誓つて偽りはありません。そして私は、その後は、
あの若者がこの手紙を持つて来て、私が、まるでむくどりのように、あなた方の網にかかるて
しまうまでは、何にも知りませんでした」

亞米利加人アメリカが話している中に、馬車は着いていた。その中には制服の巡査が二人いた。検察
官マーテンは起ち上つて、犯人の肩に手をかけた。

「さあ行こう、——」

「ちょっと彼の女に逢わせて下さいませんでしょうか?」

「いや、夫人はまだ意識が回復しないのだ。シャーロック・ホームズ先生、——何卒この後も
重大事件が突発した時は、よろしく御助力下さいますよう、幾重にもお願ひ申します」

私たちは窓際に立つて、馬車の遠ざかつてゆくのを眺めた。それから私は振り返つた途端に



犯人がテーブルの上に投げて行つた、紙片を丸めたものを見つけた。それはホームズが彼をおびき寄せた手紙であつた。

「さあ、君、これを読めるかね？ ワトソン君、——」

ホームズは笑いながら云つた。

それは一語もなく、ただ次のような舞踏人の短い一行であつた。

「いや、僕が使つた、暗号表を用いれば、これはもうゞく簡単なものだとわかるよ」
ホームズは云つた。

「これは、"COME HERE AT ONCE"（すぐに来い）と云うだけのことだよ、いくら何でもこの招待状では、彼は万障を繰合せても来ると思つたのさ。何しろこうしたものをする者は、夫人以外には無いのだと彼は信じていてるのだからね。さてこうして、親愛なワトソン君、我々もこの悪業の手先に使われていた舞踏人を、今度は善い意味のものに転化してしまつたし、また僕も君の覚書の中に、一つはなはだ特異な件をお土産にしようと云う約束も、これでともかく果したわけだ。三時四十分の汽車があるが、我々はベーカー街に行って、夕食でも食べるとしてよ

うか、——」
簡単に結末だけを。

この亜米利加人^{アメリカ}のアベー・スラニーは、ノーアウイッチの冬期巡回裁判で、死刑を宣告されたのであつたが、しかしひルトン・キュー・ピット氏が、最初に発射したと云うことが明瞭になつたので情状酌量して、死刑を改めて懲役刑とされる。

それからヒルトン・キュー・ピット夫人については、その後負傷はすっかり癒り、寡婦として一貫し、その生涯を救貧事業と、亡夫の遺産管理に専念していると云うことをきいただけである。

注釈一覧

暗号舞踏人の謎

(注1) 「リドリング公領」は底本では「リドリュグ公領」(青空文庫入力者による注)(4頁)

(注2) 青空文庫の本画像はRがBになつてゐる。明らかな間違いなのでRの絵文字にいれかえた。(17頁)

(注3) 青空文庫の本画像はRがBになつてゐる。明らかな間違いなのでRの絵文字にいれかえた。(39頁)

(注4) 青空文庫の本画像はRがBになつてゐる。明らかな間違いなのでRの絵文字にいれかえた。

(39頁)

アーサー・コナン・ドイル

暗号舞踏人の謎
The Adventure of the Dancing Men

2015年6月30日発行 1.0

著 者 アーサー・コナン・ドイル
訳 者 三上 於菟吉
発 行 者 CAS電子出版
発 行 所 アンテナハウス株式会社
住 所 東京都中央区東日本橋二丁目1番6号
電話番号 03-5829-9021
W E B www.cas-ub.com
印 刷 所 プリントオンデマンドによる印刷

本書は青空文庫 NDC K933 を CAS-UB を使用して PDF 化したものです。
画像配置サンプルとしてイラストを制作して配置しました。また本文画像の誤りを修正しました。